

東日本大震災で求められている
公衆衛生活動
とは

東日本大震災から5年 昨日に感謝を、 今日に情熱を、 明日に希望を



佐々木亮平 (ささき・りょうへい)

岩手医科大学
いわて東北メディカル・メガバンク機構
臨床研究・疫学研究部門 特命助教
●連絡先: 〒028-3694
岩手県紫波郡矢巾町西徳田 2-1-1
019-651-5110



岩室紳也 (いわむろ・しんや)

ヘルスプロモーション推進センター
(オフィスいわむろ)
●連絡先:
http:iwamuro.jp

今月のポイント

- 見守り、寄り添いに「感謝」
- 共に生きるが育む「情熱」
- 分かち合いから生まれる「希望」

見守られていなくても 生まれる力

東日本大震災から5年がたち、震災当時、中学生だった子どもたちは今年、

成人式を迎え、間違いなく次の世代を担う力強い存在になっています。しかし、われわれにはそんなに多くの時間が過ぎたのだという実感はありません。「3・11」が近づくと震災関連の報道

やニュースが増え、被災地に関係する人の多くはこの時期、とても心がざわつき、非被災地では一時、忘れかけていたことを思い出すキッカケになります。震災直後は連日のように伝え続け

られていた被災地の報道も、時間とともに緩やかにその数が減少し、今は月命日や3・11の節目の前後、高台移転など新たな動きがあった場合のみ、報道が増えるということを繰り返しながら、中長期に入ってから激減したと言っても過言ではありません。

で、今しか伝えられないことがあると信じ、月平均にすると3、4回のペースで何かしら被災地について情報発信と共有を続けています。しかし、時間の経過の力には及ばず、徐々に注目度は下がり、反応もなくなり、このままではよいのだろうかと思われ、空回りしています。

4段階のこころのケアレベルから見る自分の居場所

「忘れないで」という言葉に代表されるように、人は何か具体的なことを感ぜなくとも、見守られていることを感じるだけで安心し、力がわくものです。「見ててね、見ててね」と自分がやろうとすることを見てほしいと訴える子どもたちの姿が、そのことを教えてくれます。

震災直後、被災をした、しないに関わらず、誰もが、日本中が「がんばろう」「負けない」「絆」を合い言葉の一つになろうと必死でした。自分のことはさて置き、他者のため、人のために行動している人が数多く存在し、できる人ができることを実践し続けていた時期

佐々木、岩室はこの5年間で、共著も含めると約60編の連載や報告、寄稿を続けてきました。同時に学会等ではシンポジウムを含め約20編、各種研究会や報告会は約150回を重ね、とにかく、被災地の今を走りながら伝え続けてきたつもりです。その時その時

でした。それは、いわば立場を越えた活動であり、平時にありがちな、業務分担、役割分担で動き、自分の領域以外は仕事量が増えるためやらない傾向

にあるという状態と真逆の現象で、まさしくインフォーマルなものばかりで動いていたのだということを最近、気付かされました。2012(平成24)年12月ごろに、こころのケアをハイリスクアプローチとポピュレーションアプローチの視点で整理した図にインフォーマルとフォーマルという言葉縦軸を重ねてみました(図1)。私たち保健医療福祉従事者は、フォーマルでハイリスクな部分に視点や行動が偏りがちですが、陸前高田市で行っている「はまっぺらいん、かだつてけらいん運動」のように、インフォーマルな、ポピュレーションアプローチの部分に常に意識し続けることの重要性を再確認することができます。一方で、震災直後は、できる人ができることをという視点で、気が付けばインフォーマルな活動が少なからず行われていましたが、現地で日常業務が

陸前高田の往復生活を続けながら、同じ日本なのに、あまりにも異なる現実、毎日、日々がそこには横たわってしました。どちらも健康で文化的な生活を送ろうとしていることは間違いないのですが、まったく別の次元で生きており、そのために「共に生きる」という言葉が必要だったのかもしれない。一方で、別次元だからこそ、非被災者も非被災地も、本当は必要としているのに気が付かない視点があることを被災者に、被災地に学ばせてもらったのも事実でした。震災数日後のインタビューで、戸羽陸前高田市長が「ノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくり（復興）を進める」と答えておられたのがとても印象的でした。今こそ、陸前高田市、被災地も非被災地も、共に生きる、共に学び合う、お互いがお互いを思いやるまちづくりを実現させたいものです。

陸前高田市内に設置されている「共に生きる」碑

故・吉野弘さんの「生命（いのち）は」という詩の中で、人は互いに欠如した存在であり、欠如した者同士だからこそ、他者から満たしてもらおうのだとあ

ゆるやかに、でも情熱をもつてつながり続ける

図2 陸前高田市内に設置されている「共に生きる」碑

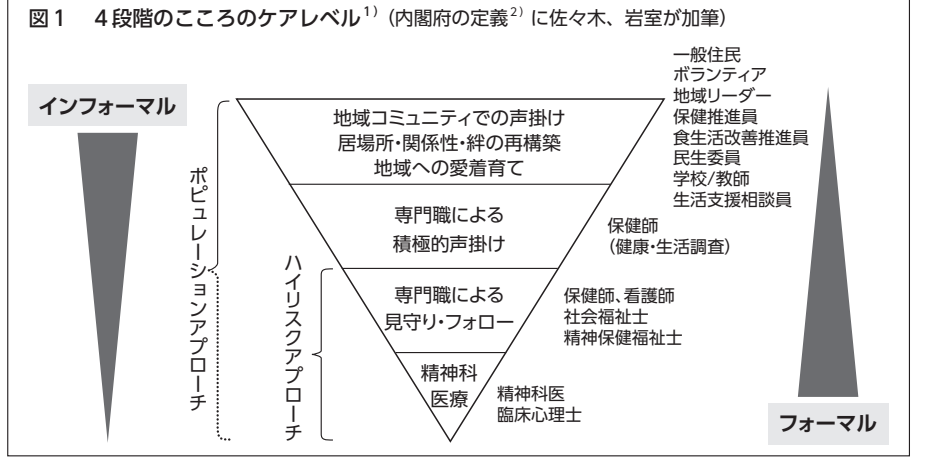


「人と人をつなぐ人」が必要

人が健康に生きていくためには「居

ります（図3）³⁾。世界は多分、他者の総和なのだ……とあります。そして世界がゆるやかに構成されていることの大切さがうたわれています。この「ゆるやかに」ということが非常に重要だと考えます。「なぜ？」と問いかけているのも、まさしく正しい答えなどではなく、本当のことは誰にも分からないことだと、でもそのことを「情熱」をもって問い続けることが大切なのではないでしょうか。

震災から5年がたちますが、いまだどうにもならないことが多く、すぐにはできないことばかりです。だからこそ、ぶれずに、根気よく、できる人ができることから、そしてゆるやかにつながり続けていくことができたと思えます。



「共に生きる」社会づくりを

復活し、佐々木も職場での業務量が増えてくると、震災前のように誰もが日常業務に追われる状態に戻り、本当に必要とされていること、行わなければならないことを見失ってしまっているように思えます。

中長期だからこそ、今している活動や事業、取り組みがどの部分にあるのか、自分自身の、一人一人の居場所を見詰め直すことで、われわれが訴え続けてきた、「全ての活動をインフォーマルなものとなつていくことができないか考える」ということの重要性を再確認できればと思っています。

震災後、絆という言葉があらためて注目されましたが、もう一つ、よく聞かれるようになった言葉が「共に生きる」でした（図2）。佐々木や岩室は震災前からHIV/AIDSの取り組み

みの中でこの言葉に出会い、当たり前のように使っていました。共に生きるは差別の言葉ではないか」と投げ掛けられたことがありました。そもそも「共生」という言葉は、もともとまったく別の次元のもの、異なるものが、互いに寄り添いながら一緒に生きていくとうとする概念であって、「自然と人間の共生」という使い方は間違っていないが、同じ人間同士で「共に生きる」では、違うものという前提が付き、差別になつているという指摘でした。つまり、「HIV感染者・AIDS患者と感染していない者は別の、異なる者ゆえに、共に生きよう」という発想自体が間違っているとのことでした。

これを震災に当てはめると、被災者と非被災者、被災地と非被災地は本来別のものではなかったはずですが、しかし、言葉の概念を変えてくらのことが、5年前に起きました。当時、佐々木は秋田と陸前高田の、岩室は横浜と

図3 「生命 (いのち) は」 吉野弘³⁾

生命 (いのち) は
自分自身だけでは完結できないように
つくられているらしい
… (中略)
生命 (いのち) は
その中に欠如 (けつじよ) を抱き
それを他者から満たしてもらおうのだ
世界は多分 他者の総和 (そうわ)
… (中略)
そのように 世界がゆるやかに構成されているのは
なぜ?
… (中略)
私も あるとき
誰かのために虹 (あぶ) だったろう
あなたも あるとき
私のための風だったかもしれない

場所」があること、「人と人とのつながりがあること」が重要です。震災・津波により居場所もつながりも奪われ

終わりがねないのは、それを実現しようとする担当者自身が、ほだし (手かせ、足かせ、束縛、迷惑) のところが

たとき、人々は「立場、役割、分野」を越え、居場所づくり、つながりづくりに奔走していました。その際に、日頃持っている役割を解放せざるを得なくなり、無意識の中で連携や協働を行っていました。しかし、連携・協働を続けるにはエネルギーがいるため、時間の経過に伴い、自分だけで解決できるが増えにくると、つながらなくともそれなりに進んでいるように錯覚してしまいます。ソシヤルキャピタルII (ぎずな+ほだし) と紹介させていただきました⁴⁾。

頼わしくなり、連携や協働で手を抜いている場合が少なくないと考えています。公衆衛生は誰のもので、誰が進めるのか、われわれ自身もずっと問い続けていますが、行政や医療機関といった一部の関係機関だけで進められるものではないことは明白です⁵⁾。一方で震災前に戻るのは真の復興ではないはずと理解していても、気が付けば震災前に戻ろうとしている自分がいま。今こそ、保健医療福祉関係者はほだしをいとわず、人と人をつなぎ続け、本来の意味での協働や連携をつくり出す必要があるのではないのでしょうか。

希望は分かち合いから

地域保健、地域福祉、公衆衛生の活動は知識や技術、スキルだけではできません。連携・協働がそうであるように日々の姿勢、普段の姿勢がスキ

ルという枠を越えて問われています。1997 (平成9) 年、WHO (世界保健機関) はジャカルタ宣言の中で、他組織と協力して進めることは、健康分野だけで取り組むより、効果的、持続的な成果が得られるとして、分野間活動の重要性について指摘しています。作家の故・井上ひさしさんの言葉で、「私たちは同じ時代を生きている」「同じ列車に乗っている」ということがあります⁶⁾。私たちは年代、立場、性別、住む場所が異なっても「今」という、同じ時代を生きているということです。

きるのか、何を分かち合うことができるのかを一緒に考えていくことが重要です。試練を乗り越える力が本当の力となると信じ、同じ時代を生きている者の一人として考え、一人一人が被災地、非被災地にかかわらず行動し続けていきましょう。「涙を蒔いて、喜びを刈る」これも井上ひさしさんの言葉です。「わずかな仕事の合間に泣きながらからに刻んでいく勉強、それがこれからの本当の勉強なんだ。…この土地できみがする本当の勉強、それがこの岩手をイーハトーボという名の理想郷にするんだよ。涙を蒔いて喜びを刈る。合言葉はこれだよ。」

集部、そして本誌の読者の皆さまにこの場をお借りしまして心より御礼申し上げます。皆さんとつながってこそ、われわれも居場所を確認することができました。引き続きどうぞよろしくお願ひいたします。

新生児仮死の後遺症により脳性まひの障害がある熊谷晋一郎さんの言葉に「絶望を分かち合うことができた先に、希望がある」というのがあります⁷⁾。今回の震災でやむを得ず、降りなければならぬ方々が多くいましたが、今、同じ列車に乗り続けてきたものとして、乗り続けている者として、何がで

つらいことがなければ人は成長しないというには酷すぎる状況が続いていますが、そう信じて、辛抱して進み続けたいと思います。



この連載は一度終わります。2年間にわたり、連載の機会をくださった編

この連載は一度終わります。2年間にわたり、連載の機会をくださった編

参考文献

- 1) 佐々木亮平, 岩室紳也. 災害を支える公衆衛生ネットワーク 東日本大震災からの復旧, 復興に学ぶ・9. こころのケアとは ポピュレーションアプローチの視点から. 公衆衛生 76 (12), 2012,p.61-66.
- 2) <http://www.bousai.go.jp/taisaku/hisaisyagyousei/pdf/kokoro.pdf>
- 3) 吉野弘. 生命は: 吉野弘 詩集, 星雲社, 2015
- 4) 佐々木亮平, 岩室紳也. 東日本大震災で求められている公衆衛生活動とは ~「日本公衆衛生学会 (長崎) シンポジウム大規模災害から健やかな日常生活への円滑な復興にむけて」から~. 月刊「地域保健」46 (12), 2015,p.56-61.
- 5) 佐々木亮平, 岩室紳也. 未来図を描く公衆衛生活動 in 陸前高田④【最終回】公衆衛生は触媒産業. 公衆衛生 78 (3), 2014,p.188-192
- 6) 井上ひさし. イーハトーボの劇列車, 新潮社, 1988
- 7) http://www.tokyo-jinken.or.jp/jyoho/56/jyoho56_interview.htm